

メッセージアウトライン

マタイの福音書7：6

「聖なるものと真珠、犬と豚」

[6]「聖なるものを犬に与えてはいけません。また、真珠を豚の前に投げてはいけません。犬や豚はそれらを足で踏みつけ、向き直って、あなたがたをかみ裂くことになります」

ここでは今までのイエスの言葉とは打って変わって非常に厳しい教えが語られている。

今までの教えは、「自分を恨んでいる兄弟と仲直りすること」(5:23~24)、「あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向け、あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着も取らせよ。一ミリオン行くように強いる者がいれば一緒に二ミリオン行き、求める者には与え、借りようとする者には背を向けてはいけないこと」(5:29~42)、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈ること」(5:43~48)、「地上ではなく天に宝を蓄えること」(6:19~21)、「まず神の国と神の義を求めること」(6:31~33)、「人をさばいてはいけないこと」(7:1~5)等が教えられた。

しかしこの7章6節では敵を愛するのではなく、相手に対する敵意さえ感じる内容である。

まず「聖なるもの」とは何か。それは神のことば、神の国の福音、神の救いの良き知らせのことである。そして「真珠」もまた同じ内容の別の表現である。→マタイ13:45~46

では「犬」「豚」とは何か。ここで言われている「犬」とは今日の私たちが連想するような家庭で飼う可愛い愛玩動物ではなく、ユダヤ人の間では汚らわしい野蛮な動物として知られていた。もちろん中には羊飼いと共に羊の群れの番をする有能な犬もいたが、それらは例外でユダヤの犬は山犬とか狼の類の野獣と考えられていた。また「豚」とは旧約聖書の時代からユダヤ人にとって宗教的に汚れた動物であり、その肉を食べることは禁じられていた。→レビ11:7、イザヤ66:17

さらにこの「犬」「豚」という言葉は人間に適用され、イスラエル人にとって異邦人、異教徒、偶像崇拜をする者のことを指した。しかし、イエスがここで言われているのはそれだけではない。

→Ⅱペテロ2:20~22「主であり、救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れから逃れたのに、再びそれに巻き込まれて打ち負かされるなら、そのような人たちの終わりの状態は、はじめの状態よりももっと悪くなります。義の道を知っていながら、自分たちに伝えられた聖なる戒めから再び離れるよりは、義の道を知らなかったほうがよかったです。『犬が自分の吐いた物に戻る』、『豚は身を洗って、また泥の中に転がる』という、ことわざどおりのことが、彼らに起こっているのです」

ここでは一度イエス・キリストの救いを知り、受け入れたのにその後、信仰から外れ世の汚れに戻っていく信者のことを言っている。

またピリピ3:2では次のように書かれている。→「犬どもに気をつけなさい。悪い働き人たちに気をつけなさい。肉体だけの割礼の者に気をつけなさい」（割礼は神の民とされた契約のしるしとして男子は生殖器の皮の一部を切り取った→創世記17章）

ここで使徒パウロはピリピ教会に「犬」と呼ばれる悪い働き人がいて、そのような者たちはユダヤ教からキリスト教に改宗した肉体だけの割礼の者だと言っている。

このような例から分かることは「犬」や「豚」とは、異邦人、異教徒、偶像礼拝者だけでなく、一度はキリストの福音を信じていたのにそこからそれてしまった不敬虔な信者のことをも指していると考えられる。→Ⅰテモテ4:1~2、Ⅱテモテ3:1~5、Ⅱペテロ2:1~2

私たちがすでにマタイ7:1~5節で学んだことは「さばいてはいけません」ということであった。それは私たちが裁判官のようになって個人的に人をさばいてはならない、過度に批判的であってはならない。まず自分の目から梁のような偏見や自己中心や高慢や愛と寛容の欠如、さばく思いなどを取り去って、それから他の人に対していかなければならないというものであった。

しかし、ここでは何が善であり悪であるか、誰が犬や豚のような人物であるかを識別してはならないとは言われていない。私たちは自分の目から梁を取りのけ、人と人を識別する力と知恵を持つ必要がある。

パウロはコリントでの伝道においてそのようなはっきりした態度を示している。→使徒18:6「しかし、彼らが反抗して口汚くののしったので、パウロは衣のちりを振り払って言った。『あなたがたの血は、あなたがたの頭上に降りかかれ。私には責任がない。今から私は異邦人のところに行く。』」

ここを見ると分かるように、コリントでは神の福音を示されたユダヤ人たちがいた。しかし、彼らはそれを信じようとしないで、反抗したりのをのしったりして福音を足で踏みつけるような態度を取った。これに対するパウロの行動は彼らに背を向けることであった。もはやパウロは彼らに伝道しようとはしない。パウロは福音を退け、真理を正しく受け入れることをしないユダヤ人たちに背を向け異邦人伝道に向かったのであった。

また今日の6節の言葉はパウロや当時の信仰者だけに関係があるのではなく、現在の私たち信仰者、クリスチャンに対しても語られていることを忘れてはならない。私たちはこの言葉の意味をよく知り、私たち自身が犬や豚のようにないか常に反省していく必要がある。自分は福音のすばらしさ、主イエス・キリストの十字架による罪の赦し、神との和解、永遠のいのちに至る聖なる教えを足で踏みつけていないだろうか。真珠のような教えを本当にわが宝、わが身の飾りとしてし

っかりと持っているだろうかということをよく省みる必要がある。

教会は福音を人々に伝えることにおいて熱心でなければならない。しかし、聖なるものを踏みつけ、神と教会の栄光を泥まみれにされることがあればそれを放任しておくべきではない。そのような人物は犬や豚のような存在として区別する必要がある。そして時には決然として真珠を与えることを拒むことにおいてキリスト教の聖なることを相手に自覚させる必要がある。神の福音を拒否してしまうということは自分を永遠のいのちにふさわしくない者にする大変な罪であるということを経験させることも教会に与えられた大切な役割なのである。

もちろん私たちは福音を伝えるために十分な配慮をすることが大切である。人々に対してつまずきになるような態度をとってはならない。……教えてやるという態度、上から目線、慇懃無礼な態度で接するならばたちどころに相手はそれを感じて、もう二度と近づいて来ないかもしれない。まず自分の目から梁を取りのけよ。

しかし私たちの接し方に十分な配慮があつたとしても、犬や豚のような過激な反応をする人もいる。そのような時こそ私たちには責任がなく、後は神の御手におまかせすることになる。

また私たちは今日の言葉から罪が人間に及ぼしている重大な影響を見ることができる。それは創世記3章に書かれているエデンの園での人間の墮落の結果、その影響は人間を真理の敵として犬や豚のようにしてしまったということである。罪は人間に神への敵対心を植え付ける。

→ローマ8:7「なぜなら肉の思いは神に敵対するからです。……」、ガラテヤ5:19~21

今の世の中においても同じ反応が見られる。ある人はキリストの十字架について聞くと馬鹿にして、あざけり、あるいは宗教かぶれの弱い人間だと決めつける。そして急進派は実際に行動を起こして教会を攻撃し迫害する。教会は破壊され、焼かれ、牧師や信徒は捕らえられ投獄される。教会の歴史を見ればこのようなことは今日に至るまで世界の各地で続いている。

罪は人間性の最も深いところに食い込んで人間を獣のように変え、神に対する完全な敵対者としてしまっている。そのようなこの世において、イエス・キリストを救い主と信じる恵みを与えられた私たちは神のすばらしい救いの福音を証しし、宣べ伝えるために、聖霊の助けにより頼み、それにふさわしい者として整えられ、知恵と力、識別力を祈り求め、地の塩、世の光としての役割を果たしていくことが大切である。